

大介翁生誕百年祭記念

櫻
影





遺影

昭和四年十月 古稀記念 和田三造画伯制作



遺 影

昭和四年十月 古稀記念 和田三造画伯制作

『桜の影』刊行のことば

桜塘は大川翁の雅号である。これはおそらく住みなれた向島から絵のような春の墨堤を望んで共感された心の象徴であつたと思う。

明治・大正・昭和にかけて日本経済の勃興期に、産業界の騎士として、独歩の地位をきざいた颯爽たる舞台姿は、すでに当代の人のよく知るところ、まさに堤上の桜花に比すべきであろう。

歴史は夜作られるとか、燃ゆる憂国の至誠を内につつんで、人間味豊かなかずかずの楽屋生活のあつたことは当然のこととは申しながら、翁独特の持ち味と大胆さは、まさに名優の名にそむかぬものがあり、この楽屋こそ絢爛たる桜花を培う堤ではあるまいか。

志在四海 而尙恭儉 心包宇宙 而無驕盈
の銘と思ひあわせてうなずかれる。

やがて萌えいずる若桜を心にえがかれた育英会も、翁の堤にいだかれた香り高い芸術の一つであつた。戦災の嵐に打ちたおされた若桜は、桜影会の名のもとに、慈父を慕つていまこの堤の上に立ちあがろうとしている。花は根にかえり、真味は堤にとどまつているであろう。

翁の趣味芸道はその数かならずしも多いとはいえないが、その理解の深さ広さは他の追隨をゆるさぬものがあり、ことにみずから手がけられた趣味にはトコトンまで徹してやまない信条と、古い型を破つて自分の個性を傍若無人に發揮されたところに、翁の真面目があつたようだ。事業と同様これらの趣味芸道もすべて一つの理想に結びつけられていたのではあるまいか。それは

一点真心 萬變不窮
の銘が静かに説明している。

当時根津・大川が宴会の両雄であつたとの某料亭の述懐も、飲めない翁の酔人ぶりがしのばれて面白い、が、

これとても不得手を超えて編みだされた翁の芸であり、
粹人といわれたゆえんであろう。

春回雨点溪声裡 人酔桜花萬緑中

哥沢は四十余年の芸歴をもつと、翁生前の口癖だつた。けだし得意中の得意……至芸であつたようだが、いまその名調子を伝えるすべのないのがいかにも残念である。愛誦の二句を添えてわずかにその余韻をしのぶよすがとする。

ここに集めた遺墨は、功なり名とげた晩年の作が多い。画上翁みずからかたる……書画ともに無師の芸……と。されどその雅趣深々、書は画となり、絵は語りまた唄う。墨人一如、翁の三昧境、いまにみる心地がする。

なお左腕の健筆は翁のもつとも快心の技であつたようだ。翁は酒と同様生来の左ききではない。少時、王子製紙の凶工たりしとき、苦心訓練のたまものという。書画

もとより絶妙なれども、無言の教示その墨底に秘せられあるを感じる。

ことに翁の絶筆とおもわれる湯河原名勝見附松の賛にいたつては、自己の非力をかたる素直さ、他日ふたたびそれに挑まんとする喜寿翁の闘志と気魄、將た何をかいわんやである。

有志秘蔵の割愛をえてここに集載し、『桜の影』と題して諸賢の座右におくる。数ある翁の伝記の姉妹として各位の懐旧に資するところあらば編者の幸いこれに過ぎるものはない。

明治八年ヨリ同二十二年ニ至ル二十四年間ハ大川兄弟ガ奮闘努力ノ期間ナリ 回顧スレバ其始
兄弟受ル処ノ俸給僅ニ兄ハ五円弟ハ三円五十銭ナリキ 母ガ手製ノ襦袢ニ三尺帯ヲ締メ草履下
駄(靴ヲ購ウ資力ヲ欠ク)ニテ午前六時前ヨリ夜十時後迄工場内ニ活動シ聊モ倦怠疲労ノ状ヲ
示サズ 蓋シ出世栄達唯一ノ途ハ他人追隨ヲ容サザル誠意ト努力ヲ提シ長上ヲ敬服セシメ同僚
ヲシテ批判ノ余地無カラシムルニ在ルヲ悟レルガ為メナリ 兄弟ノ今日ノ事ハ偶然ニ非ス 其
源ハ此大覚悟ニアリ

昭和六年新春 桜塘述懷漫画

(池田氏藏)



明治八年ヨリ三十二年ニ至ル

二十四年向ハ六川見テオケ倉庫ガ

力、即向テリ田畠スレバ其後モ

受セズ、俸給付、足ハ五割カニ

五ナキナリキ母ガ午襲テ神一ニ

足希テ飾ヲ草履下駄一靴ツ踏

道石ヲケシニラキ云六時前

ヨリ夜十時後也工場内ハ其

即チ保至應テハ快リホマ

蓋世世保通附一途、他人

ハ道随ワ客ヤル誠者ト哲カ

ヲ展レ長上ヲ敬服ヒシヨリ條

シテ批判、條地世カラレハ

ツ悟レルカ石ソリ足カ、今ハ

保然ニテラズ其源ハ此大畏

昭和六年ハ春

橋角

志保堂画



戒慎乎其所不睹
恐懼乎其所不聞

大正戊午初夏 桜塘逸人

(田幡氏藏)

時々反己世間無可怨之人
事々問心腹中無難言之事

(下村氏藏)

戒慎乎其所不睹
恐懼乎其所不聞

大正戊午初是

松澤逸人

時之及已世間世可惡之人
事之間心腹中世難言之事

有下村純三君

大川平三郎書



志在四海而尚恭儉
心包宇宙而無驕盈

大石詞兄清鑑 桜塘

(大石氏藏)

天道積聚衆精以為光
聖人積聚衆善以為光

桜塘消閑一戲

(下村氏藏)

志在四海而尚恭儉
心包宇宙而世驚重

大石刻元法卷 柯塘

天道種髮衆精以為光
聖人積聚衆善以為功

柯塘酒一鏡

隱逸林中無米辱
道義路上無炎涼

桜塘閑人戲試兩腕

(田幡氏藏)

靜中看得天機妙
閑裡廻觀世路難

桜塘老生

試雙腕

(製紙博物館藏)

隱逸林中草若厚
蘄蕘出草亦新

松溪道人

松溪道人

靜中看得王機妙
幽野興增世智哉

松溪先生

法雙晚

春回雨点

溪声之裡

絵にかけば

手付きおかしき

ひだりきき

昭和辛未新春
湯河原静遊

床上桜塘

得意满面

頻揮雙腕

人醉桜花

竹影中

(田幡氏蔵)

春光一半歸楊柳

花事三分属海棠

昭和六年夏尽時

層雲峡静遊一夕

応山田敏子女子需

桜塘揮雙腕

柔
克
制

剛
之
凶

昭和十年晚秋於

宜蘭客舍

桜塘消閑一戲

兒童巧ニ大水牛ヲ

使役スル有様ヲ写シ

床上困臥ノ理作先

生ヲ慰ント欲ス

(大川理作氏藏)

(繪)

松
築
山

昭和七年十月

白川温泉

(田幡氏藏)

武次夫婦

天麩羅喰二

出掛ル体

昭和九年五月 日 桜塘写 (田辺氏藏)

(小軸)

四海生春風

昭和九年十一月一日桜塘 (田辺氏藏)

田辺兄妹弟三人

昭和十年十月十三日写

修 一 十一歳

妙子 九歳

健雄 八歳

於 瀧野川中里本邸

午時 桜塘 七十六歳齡

此日桜塘心氣爽快偶々孫兒
三人來訪皆強健學業成績亦
頗ル良好戲写其形容

四海生春風
 四海生春風
 昭和九年十一月十日
 修一
 十一年元旦
 十一年一月
 十一年一月
 也



(色紙)

若非似水

清無底

争得如水

凜弘人

桜塘

(山内幾馬氏藏)

(色紙)

志在四海而尚

恭儉

心包宇宙而無

驕盈

(池田氏藏)

志在四海而尚
恭儉
心包宇宙而世
騫登

孫煥

若非似水
清可底
爭得如米
潔拂人
孫煥

下村氏宛書簡

謹啓 過日中は御上京の処万事欠礼勝に相成候事御寛恕可被下候

偕池上秀畝画伯今回樺太漫遊を思立たれ大泊、豊原、真岡位は是非御一週被成候筈に存じ、真岡へ御出相成候は、御宿泊所其他万事十分に御世話申上候様御願致候製紙工場もまだ始めての事ならんと拝察し候間十分御了解被成候迄懇切の御説明可被成候

拙生の大胆なる計画に成れる手井の人造湖も御覧を乞ふへしに候（融雪の湯水を集め置き之を利用し無水の真岡に水が元なる製紙業を始めたることを克く御話可被成候）

先生の御希望如何は承り不申候得とも紀念の為に地方人有志の間の御申込は御引受あるや否も御相談の上可然御取計可被下候

丸菊楼一夕の小酌位先生御嫌ひに無之候は、御案内方可然御取計可被成候

先は当用如此に御座候

匆々

花器

（池田氏蔵）

花器

湯河原名勝
為池田子

（池田氏蔵）

喜

昭和十一年七月七日
七七翁大川平三郎書

(池田氏藏)

箱書(昭和十一年十月)

(池田氏藏)

昭和十一年桜塘七十七回ノ証辰ヲ迎フ
近者病癒テ更ニ業界ニ活躍セントス
明友相諮リテ祝典ヲ挙クルノ企アリ
親近者来リテ喜字ノ揮毫ヲ需ムルモノ多シ
池田新一君ハ桜塘ノ家ニ在リテ最重要ノ任
務ヲ掌ルノ人
需ニ応シテ第一ニ揮毫セル作品ハ拙ナレト
モ即是矣

哥洋

傳書ふくく玉章も思ひ
しそ厚常つくる音
等月あふくを思ひ
さんふあふくを思ひ
等さんあふくを思ひ
まふくあふくを思ひ
を思ひ

玉と書六月の常く
月と書六月の常く
玉と書六月の常く
玉と書六月の常く
玉と書六月の常く
玉と書六月の常く
玉と書六月の常く
玉と書六月の常く

桜塘漫画

(浅井氏藏)

桜塘子生レテ画ヲ習ハズ 而モ時ニ觸レ興ニ
乗シテ珍画ヲ物スルコトアリ 其作品後日見
テ頗ル興味アルヲ感スルモノ無キニアラズ
片々之ヲ屑籠ニ投スルニ忍ビスト家人此画帳
ヲ製ス 子之ヲ受ケテ喜フ 処兒童ガ玩具ヲ得
タルノ状ニ類セン 呵々

獨捕靈通

橋邊子生ニテ画ヲ習ハズ而モ
時ニ臨シ興ニ來ジテ珍重シ物
スルニアリ其作品後日見
テ眼ハ興味アルヲ感スルモノ好キト
クニテ片々ニテ居ルニ投スル
ニズトスト亦人々画帋ヲ表
ス子ニテ度々テ表ヲカキ児童ガ
既ニテ得ルニ此類ニ同ト

①

昭和五年三月二十六日帝都復興祭式後桜塘子
路傍ニ休憩ス折シモ知人通過シテ急病ト誤
リ一驚ノ体画キテ後日ノ笑柄トス

②

湯河原静遊記念

昭和六年一月四日湯河原大倉公園ニ散策ヲ試
ム園中小亭アリ絶壁ノ下溪流騰奔風光佳
絶閑寂意ニ適ス直ニ筆ヲ採テ之ヲ画ク随
行者田鉄氏案内者ニ帰路ヲ問フ朝居女史頻
々奔流ヲ愛瞰ス漫然烟ヲ喫スルハ予ナリ

春回雨点溪声之裡

昭和辛未新春

湯河原静遊中

桜塘

頻揮雙腕

得意满面

之囡

絵にかけば

手つき

おかしや

ひだりきき

人酔桜花

竹影中

(田幡氏感)

③

昭和五年ハ桜塘子最悪戦苦闘裡ニ経過セリ
歳晚聊疲勞ヲ感シタルヲ以テ生来始メテノ静
養ヲ湯河原天野屋ニ試ム 六年一月四日函嶺
湯滝ノ温泉地ヲ踏查ス 山ノ中腹ノ架橋破損
シテ危険状態ニアリ 桜塘子平然トシテ先ツ
渡ル 田鉄氏橋ノ央ニ倒レ漸クシテ墜落ヲ免
カル 田鉄氏元来相忽ノ人ナリ 斯ル事件ハ
其例頗ル多シ 敢テ奇トスルニ足ラスト雖記
念トシテ之ヲ漫画トス 他日之ヲ繙ク時当時
ノ情况ヲ偲フニ足ラン歟



春回雨 返溪聲 何

卯和辛未 上 手
楊子原 齋 止 中

楊子

疑揮雙腕

得去傷風

之痛

續一 之 中

之 中

之 中

之 中

入 柳 中

入 柳 中



卯和五年、楊子原 齋 氏 同 柳 之 怪 名 下
載 晚 柳 齋 氏 之 風 之 名 下 以 之 生 未 婚 之 子 楊 齋
之 子 原 天 齋 氏 之 子 也 六 年

一月 穿 畫 扇 湯 水
之 地 也 改 查 之
山 中 隱 修 行 者
破 後 之 名 聲

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年

楊 子 原 齋 氏
之 子 也 六 年



④

昭和六年四月四日
湯河原桜山ニ登ル 桜塘
老ヒタリト雖健脚 田鉄氏老ヘスト雖及バズ
婦女ノ援助ヲ求ム 田幡氏曰ク桜花爛熳汗ダ
クダケ

⑤

昭和六年四月十九日湯河原広河原仙花園ニ遊
ブ 溪流狂奔幽静賞スベシ田鉄氏千代女ヲ伴
フ 途上小橋ヲ架ス 園主小野加助一人ニテ
架セルモノ 田鉄氏千代女ヲ抱擁セルノ図ヲ
写ス

⑥

昭和辛未仲夏於湯河原客舎

桜塘戯画

岩村峻君ハ義太夫狂ナリ 場所ヲ撰マス時ヲ
嫌ハズ特ニ黄金ヲ散スルヲ意トセス 友人皆
評ス此人ニシテ此病無クンバ少クモ富豪番付
ノ幕ノ内ニ入ル資格アリ惜ムベシト 君ノ真
意ハ大ニ異レリ 黄金何物ソ 紙治酒屋梅忠
ノ如キ其 処ニ至リ嬌音一番聴衆ヲシテ夢ニ
入ラシム 就中幾多ノ美形秋波ヲ送ル 此間
ノ愉快彼等俗徒ノ味フコトヲ得サル処乃公独
之ヲ占ム 是豈人生ノ真味ヲ解スルモノト云
フベキニアラズヤ 是ソ君ノ徹底セル悟道ナ
ラン
予ハ君ニ忠言ヲ呈シテ曰ク人間八年ト共ニ老
ユ 若キ間ニ盛ニ歌イ頻々友人ヲ苦シメ歌ツ
テ歌ツテ歌イ通スベシト

⑦

桜塘子田鉄子犬殺ノ囟ヲ製ス 田鉄子傍ニア
リテ喜色満面ノ状是ナリ 而シテ両子ノ顔面
ハ朝居女史ノ作ニシテ以下ハ桜塘子之ヲ画ク
評者皆曰ク両子ノ客体頗ル酷似スト 桜塘子
素ヨリ甚不服不滿ナリ 閑ニ乘シテ事由ヲ附
記シ他日ノ参考トス

岩村崎君ハ義不丈狂リ揚子
揚子不時ヲ嫌ハ不特ト黄金ツ敷
不ルツ者トヒ大友人皆評ス以人ニシラ
中流世ニハ少ク長留原番世ノ業

ノ内ニ入リ望位アリ揚子ハレハ

廣ノ英言ハ大ニ通サレリ
黄金何物ゾ故修ノ所屋

揚子ハ如キ其妙
一友ハ至リ揚子

シ多美メ入ラシム

兜巾 兼多ノ居飛

村波ツ送 惜クマシヤ

ルハ向ノ ナラソクイ

愉快独等

俗徒ハ味フイラ

得ガレズ乃公智

之ヲ石ハ是堂人生

意味ヲ解スルニトあハキニ
アトモヤ是ツ君ハ徹底ナル揚子ナラン
子ハ君ハ定一者ヲ望シテ日々人同ク年ト共ニ老ニ
若キ同ク望ニ我イ疑ハズ人ヲ若シテ我ワシ我ワシ
我イ道ニシト



明和自子未四
打揚子ハ公ハ
揚子 氏
印

揚子用佛子大教高岩田侯子
傍ニアリキ喜色備面ハ枕
世ナリ而シテ両子

勢面ハ朝辰

力更

作

ミレテ

以下ニ揚子

ニツ屋ク

評名塔

曰ウ両子

ノ突眼

照照ハスト

揚子素手ニ道不服

不満ナリ閑ニ染シテ

事由ソ附記シ他日ノ参考トス

揚子



⑧

田鉄秘書滑稽洒落ノ人ナリ 好シテ滑脱ノ舞踊ヲ演ス 就中犬殺ヲ舞フ時其技真ニ迫リ観客ヲ笑殺セントス 拍手拍手再演又再演 秘書愛敬満面得意又満面稚氣愛スベシ 戯レニ冷評ヲ加フル者アリ 曰ク是舞踊ノ巧ナルニアラズ 秘書ノ風格自然ニ犬殺ニ適スルガ故ナルニ過キズト 聴者皆大笑ス 記念トシテ桜塘消閑ノ余技ヲ揮フ

昭和八年四月秋湯河原客偶、
前山満目桜花爛熳之光景
春回雨点溪声裡、人醉桜花万緑中



田津初逢滑壁洒落
 人ヲ好シ滑壁ノ衆
 踊リ當テ舞ハシテ教
 示ス時其叔夷ト道
 親告リ笑教ハシス

拍子拍子再演

又再演

和志之鼓

俳句得云

又満面雅氣

愛スベシ物シニ吟評

ヲ加フル者アリ日々是津湖

ニテハルハアヲ不和昔ハ爪持

月然ハ大森ニ道スルガ故

花ニ道キ不テ歌者皆大

笑不記念トシテ揚陣情用ノ餘技ヲ揮



楊柳
 畫



春回而既陰解
 人解渴花系錦伴

昭和八年四月
 楊柳原景備
 於山内月花
 柳陰之先景

楊柳

⑨

桜塘子頻對畫帳不得畫是有苦心之狀
朝居女史在傍而不顧之耽華道研究之囟

⑩

夏山雨漸霽

楊師子頻打坐
心不得定
有
昔心之狀
朝居口史
在傳而
不飲之歌
華道師完之而



⑪

昭和十一年新春桜塘養病在湯河原夜來降雪
天地白皚々静寂不堪閑頻戲執筆製之
独寝の淋しさにあん燈引よせのむたばこ、
枕にあてし文のはし、
かへすかへすも深酒と浮氣の出ぬようと、
書きたる人はよその花、
それに迷うたが馬鹿らしい。

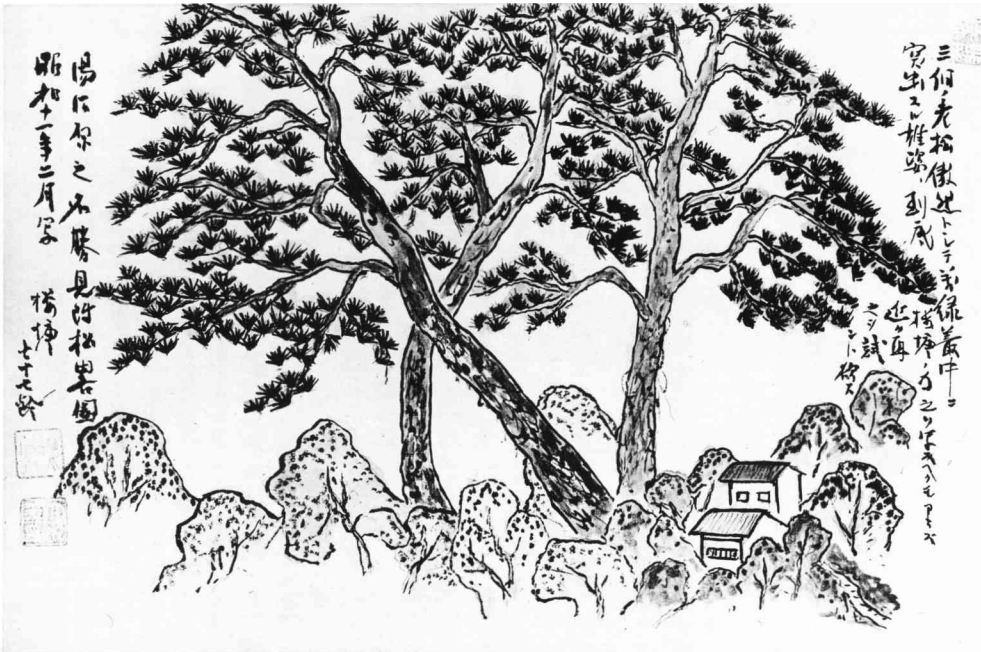
⑫

湯河原之名勝見附松略図

昭和十一年二月写

桜塘七十七齡

三個ノ老松傲然トシテ万緑叢中ニ突出スル雄
姿到底桜塘ノ力之ヲ写スヘクモアラズ近ク再
之ヲ試ント欲ス



編集後記

大川平三郎翁生誕百年祭記念として、翁の制作された書画を蒐めて「桜の影」を刊行することになって、昨年十二月六日に開催した大川先生二十三回忌記念敬慕会に、来賓及び会員の持参展示された掛軸類を写真撮影しておいたものに、画帖や掛軸、天然色印画等を追加撮影して編集致しました。翁の面影を偲ばしめる原色版は、和田三造画伯の油絵をゴム印画法によって複製された珍しい天然色写真を原稿として製版印刷したもので、原画のもつ油絵の階調を充分に表現することが出来なかったのではないかと思います。翁の作品は、外見では極めて翁が器用であられたことを示しているが、その内側に蔵するものは翁のお人柄を良く物語っていて、今更に我々をして追慕せしめるものがあると信じます。淡彩を施した小軸や画帖の階調をあらわす為に、印刷はコロッタ

イブ法を採用しました。これは通常多く使用される網版よりも微細な文字や調子の損われることを防ぐ点にも意味があります。収載された書画の類はそれぞれ大小があり、画帖以外は不揃いでしたが、編集の都合上或る程度整頓せざるを得なかったのであります。又編集に着手してから約一カ月の期間で仕上げたので、文中多少の誤りなきを保証し得ないと思えます。この点は予じめ御了承を願いたいと思えます。巻頭の「桜の影」刊行のことばにあるように、翁の伝記の姉妹編として、未永く保存されますよう念願して止みません。なお写真撮影のために貴重な御所蔵品を貸与された各位に対し厚く感謝申し上げます。次第です。

昭和三十四年十月十日 印刷
昭和三十四年十月二十四日 発行

「桜の影」(非売品)

編集者 茂木 正

発行者 桜影 会
東京都港区芝浦一ノ五六
東京運輸倉庫株式会社内

印刷所 凸版印刷株式会社
東京都台東区二長町一